

酉年の次は戌年となりますが、犬と日本人の深い関係を解く

1 イヌの祖先は何か

前回、酉年について少し勉強しました。そこで、今回は次の戌年について考えてみたいと思います。よくよく考えると「イヌ」という言葉は、通常の「犬」だけではなく戌年の「戌」という字も書きますし、また、「狗」という字を書いたりします。このように一つの物事に対して複数の漢字、特に一文字の漢字が書かれる場合というのは、その物事の歴史が古い場合や、地域ごとにその物事の意味合いが異なる場合が少なくありません。もちろん、十二支の場合は、もともと違う意味合いの 1 2 の現象を、民衆にわかりやすくするために動物を当てたということですから、十二支に関して漢字が二つあることは、必ずしも当てはまるものではないかもしれません。しかし、十二支が日本に伝来した時点で、多くの人はその動物を知っている、またはその特徴が共通の認識としてわかるということですから、当然に、それ以上の歴史、それも人々との関係に深い歴史があったということになります。しかし、「イヌ」の場合は戌年の「戌」という漢字以外にも「犬」と「狗」、二つの文字が当てられていますから、その歴史は非常に深いと言えますし、また「イヌ」という動物に考えられていることも、地域や身分によって様々に変わってきたのではないのでしょうか。

さて、その意味で「イヌ」に関してみてみましょう。

イヌの先祖としては、イヌと染色対数が同じで相互に交配ができ、交雑種に妊性があるオオカミ、ジャッカル、コヨーテのいずれにも可能性があります。最も有力な説は、家畜化されたオオカミがさらに世界各地のオオカミと交配されて今日のイヌになったという説です。ですから、今でも「オオカミ犬」などと言う人が少なくありません。そのイヌが人間とともに暮らすようになった、言い換えれば家畜化されたのは、今から 3 万年以上前にネアンデルタール人が家畜化していたと言われていました。これは 1986 年、埴原和郎博士らによってシリアのドゥアラ洞窟の住居遺跡の発掘調査が行われ、その時に、イヌの完全な骨が出てきたことによります。完全な骨が出てきたということは、分解して食べなかったということですから、ある意味において家畜化されていたということになります。

2 海外の神話に出てくる犬に対する考え方

このまま少し海外における犬の話の話を続けましょう。

犬は、様々な宗教において語られています。それだけ、人に近いところに犬がいたということではないでしょうか。そもそもギリシアの哲学者アリストテレスの『動物誌』には、犬の病気として、狂犬病・扁桃腺炎・脚の痛風の三つを挙げています。そして、犬が眠りながら吠えるのを観察して、人以外の動物も夢を見ると推測しています。このように、すでに古代ギリシア時代には、イヌが研究対象となっていました。プリニウスの『博物誌』には、アレクサンドロス大王がインド遠征を行った際、アルバニアの王から巨大な犬を贈られた話があり、この犬と熊・ライオン・インド象を闘わせた話が載っています。つまり、この時には闘犬の文化がすでにあっただけということになります。単純に愛玩動物としてだけではなく、「戦う」「守る」という点からも犬を育てていたのではないのでしょうか。

古代宗教では、犬を大事にしている宗教も少なくありません。拝火教とも言われるゾロアスター教では、聖典『アベスタ』のなかで、「地上一戸の家たりとも、牧場の犬と家の犬、この二種の犬によらずして存在するものはあらざるなり」と記されていて、犬を大事な存在としています。また古代オリエントでは、犬は夜の番人とされ、「番犬」という考え方があり、闇の中に住む悪魔を追い払う霊的な能力を持つ動物と考えられていたのです。この考え方は、古代ペルシャやギリシアなどに伝わり、民間信仰として長く生きていました。特に、「夜、犬が闇の中を歩いて、人に忍び寄る悪霊を吠えて追い払う」ということを言われるようになったのです。ギリシア神話では、ケルベロスというような番犬が登場することは有名です。「吠えて」悪霊を追い払うということは、日本でも大きな音を立てて邪気を払うという考え方があり、神社での神事において弓を鳴らすとか、拍手を打つというように音を立てることをよく行います。古代ペルシャやギリシアなどと、古代の日本の悪霊を払う考え方は同じように考えられていたのかもしれませんが。また北欧の神話では、犬は忠誠心の象徴として描かれています。そのために、むやみに冥界へと近づく者たちを追い払い、冥界から逃げ出そうとする死者を見張る番犬「ガルム」のように描かれています。中世には忠誠と用心深さのほか、勇気や保護をあらわし、信者の保護者である司祭の象徴にもなりました。

一方、犬を忌み嫌う宗教も少なくありません。

古代ユダヤ人・ヘブライ人は、犬は人間の食べない動物の肉を食べ、場合によっては人を襲い人の肉を食べるといった習性を挙げ、そのことから犬は不浄な動物であるとしています。宗教的には邪悪・怠惰・欺瞞などの象徴となっています。よくアメリカ人の中で「マッドドック（狂犬）」とあだ名されているような人がいますが、それらはすべて「神をも恐れぬ」というような感覚を持っています。キリスト教でも犬は忌み嫌われています。言葉遊びのようなものですが、英語の「god（神）」の綴りを逆さまにすると「dog（犬）」になることから、神の存在の反対側にいるものというようなイメージになってしまっているのです。つまり悪魔・異教・邪教の象徴として犬を扱ったり、あるいは話の中に出てきます。聖書のなかでは「凶暴な人間」の代名詞というようなことで、犬という言葉を使うことも少なくないのです。大航海時代など、キリスト教の影響が強かった時代の船の上では、「犬を船に乗せると悪魔に引きずり込まれる」と言われて、犬を乗せることを禁止していた船も少なくありませ

んでした。そして、ヘブライ文化の影響を受けているイスラム教では、やはり犬を忌み嫌っています。一つには、アリストテレスも恐れた狂犬病でしょう。そのために、イスラム教の戒律の中には「犬に舐められたら、10回手を洗わなければならない」という戒律も存在するほどです。また、ユダヤ教やキリスト教の考え方から「犬は悪魔の使い」と考えられています。犬は「前世で罪を犯した人間が生まれ変わった姿」であるとも伝えられています。そのために犬は悪に近い存在や、犬に近づくと悪に染まるというように考えられているようです。

3 日本の中の犬の話

さて、日本ではどうでしょうか。

日本最古の犬の骨は、神奈川県夏島貝塚で発見された約9500年前のもの、また愛媛県黒岩洞窟で埋葬された犬の骨で約8500年前のものなどがあります。これ以外にも、縄文時代に埋葬された犬の骨が出土しています。それくらい昔から、犬と人間は日本で一緒にいたということになります。また、銅鐸のなかに、弓を射る人物と猪を囲む五頭の犬の狩猟図文が鋳出されたものがあります。銅鐸が部落共同の祭器で、農耕祭祀に関連すると考えると、犬は農業神へ献供すべき御饌の狩りをするための一員となったり、場合によっては犬が神に供えられたりということもあったのかもしれませんが。古墳のなかには埴輪犬が多く出土しています。なかには群馬県境町上武士で出土した埴輪犬のように鈴付きの首輪をしたものもあります。これは、埋葬者が犬をペットとして飼っていたということを示すものであると言われています。もちろん、その犬が猟犬や闘犬なのか、愛玩動物であったのかはわかりません。しかし、すでに犬そのものが人間社会のなかに十分に入っていたということは想像できるのではないのでしょうか。

『古事記』の長谷朝倉宮（雄略天皇）の段に、志幾大県主が天皇の怒りを恐れて、白犬に鈴を付けて天皇に献上したところ、天皇の怒りが解けた話が載っています。この話などから見ても、犬は人間側の動物として、神との間を行き来する動物というように思われていたようです。そして、大和朝廷になったのちも、犬は様々に役に立っていきます。『日本書紀』の安閑天皇二年（535年）八月に「詔して国々に犬養部を置く」とあります。犬養部は飼養する犬を率い、または育てて朝廷に奉仕する「品部」、つまり朝廷に物を納める役職の場所です。この犬は、祭祀用の供肉を得るために使う猟犬を飼育したのではないかという「猟犬飼育説」と、番犬を飼育調教し、朝廷の安全を守る犬を育てた「番犬飼育説」があります。実際に大蔵や朱門の守衛のところには、番犬がいたとも言われています。一方、『万葉集』には柿本人麻呂の歌に、

「垣越 犬召越 鳥獵為公 青山 葉茂山邊 馬安公」

垣越しに、犬呼び越して、鳥獵（とがり）する君、青山の、茂き山辺に、馬休め君
というような歌が残されているから、どちらの説も捨てがたいということになるのではな

いでしょうか。

また、この「イヌカイ」という地名は、「犬養部」というだけではなく、「井交」、つまり鉱物採掘用の井や井堰を作り、管理したことに由来するとされています。そう言えば、昔話の『花咲か爺さん』では、「ここ掘れ、わんわん」というフレーズが出てきます。犬が、ここを掘りなさいと指示して、実際に掘ってみると宝物が出てくるという昔話です。この話に出てくる犬は、川で拾った白い子犬ということになっています。白ということで神様を連想させますし、また「川」と「掘る」ということから、農業をイメージするというとも言えます。しかし、それだけではなく犬が「ここを掘れ」と指示するというように、何かから助けた動物の指示に従って恩恵を被るというのは、例えば東北の平泉に伝わる「白鹿伝説」があります。

白鹿伝説は慈覚大師が巡業中、現在の毛越寺のある場所にさしかかった時に白鹿の毛に誘導され、その後に従って進むと薬師如来が白髪の老人に姿を変えて現れて、慈覚大師に、この地に堂宇を建立して、霊場にするようにお告げをしたそうです。これが現在、平泉の中尊寺の隣にある毛越寺になると言われています。このほかにも、「館林城尾曳稲荷伝説」などもあります。これも同種のもので、この近くの城主・赤井照光が、子供にいじめられた子ぎつねを助けると、その夜更けにきつねが現われて、「子ぎつねを助けてくれて、ありがとう。あと、お城を作るなら、館林がいいよ」と言い、そこに作ったのが館林城であるという伝説があります。館林城址公園の中には、今でも尾曳稲荷神社があり、その時のきつねを祭っていると言われているのです。

「イヌカイ」という地名から、『花咲か爺さん』の話になりました。白鹿伝説や館林城の話は、「そこに何かを作る」ということですが、「イヌカイ」は「掘る」ということですから、ある意味で「土」とより一層強く結びついているのかもしれない。犬と「掘る」、そして「井交」つまり「水」、そして「宝」、つまり「稲」につながるというのはなかなか深いつながりのような気がします。

4 犬飼と井交と弘法大使

さて「ここ掘れ」と言えば、弘法大師も様々なところを掘るように言っています。「弘法水」は、全国を巡礼していた弘法大師が、錫杖で土地をたたくと、そこから水が出てきて、その地域の人を助けるという話です。また、その水は、どんなに日照りの時にも絶対に枯れることがないというような話です。「ここ掘れ、わんわん」の花咲か爺さんも、最後には、犬を焼かれた灰で「枯れ木に花を咲かせましょう」と言って、枯れることを防ぐというような話になっています。「弘法水」の方はもっと直接的に水が出てくるということになっています。ある調査によると、弘法大師に由来する湧き水、「弘法水」というのは、「弘法清水」「弘法井戸」「加持水」「杖突水」「金剛水」「閻伽水」「霊水」「臼池」「硯水」「塩井」などと呼ばれ、約1500カ所あると言います。安倍晴明の「清明水」が約70カ所、日蓮上人の

「日蓮水」が約40カ所であることを考えれば、かなり多い数ではないかと思われます。また「弘法水」のなかには、修善寺温泉のように温泉や薬効のあるものも少なくないために、北は青森県の下北半島から、南は鹿児島県加計呂麻島にまで存在します。

さて、この弘法大師の開いた寺といえば、高野山金剛峰寺ですが、このお寺にも犬にまつわる言い伝えがあります。

弘法大師は804年、最澄らとともに唐に渡り、唐の都、長安の青龍寺で恵果和尚から真言密教を学びます。帰国の時、空海は唐から日本に向かって「密教を広めるのに最適の地に落ちよ」と唱えて、三鈷杵（さんこしよ）という仏教で使う道具を投げるのです。帰国後、その三鈷杵を探して高野山に到った空海は、山中で白黒二匹の犬を連れた狩人に出会い、その犬の先導で、松の木に懸かった三鈷杵を見つけ、真言密教の地として高野山開山を決めたとされるのです。この時の犬を連れた狩人は、丹生都比売（にゅうつひめ）神の子である狩場（高野）明神だったと言われています。このような故事から、丹生・狩場明神は、空海ならびに密教の護法（守護神）ともされて、空海や高野山の関連する寺社などにも、その神使の和犬が置かれるようになったと言われています。

このように犬と弘法大師のように、「ここ掘れ」というのはどうもつながりがあるようです。なお、両神は高野山一帯で、塗料となる丹の原料を採掘する豪族、丹生氏の氏神だったと言われていますが、この丹の原料の産地は水銀の産地でもあるのです。「井交」の方の「イヌカイ」につながる話でもあるのです。

5 神社の前の犬といえば狛犬

さて、神社の前にいる犬といえば「狛犬」です。

起源はエジプト・ペルシア・インドなどの墳墓や、神殿や門前に置く獅子型の像にまで逆のぼるとされています。そのように思えば、エジプトのピラミッドの前にあるスフィンクスも、狛犬のように見えてきますね。この獅子型の像が、中国で「唐獅子」になり、そしてそれが日本に伝わって「狛犬」になったと言われています。このようないきさつで出てきているので、狛犬は和犬ではなく獅子のような形になっているものも少なくありません。逆に、弘法大師を連れてきた犬、つまり狩場明神の狛犬は和犬ですから、その辺の違いも面白いところでは。

さて、「狛犬」の「こま」はどうも韓国の「高麗（こま）」からきていると言われています。『延喜式』巻第四十六の「左右衛門府式」に、「凡そ大儀の日に兕（じ）像を会昌門左に居（す）ゑ、事畢（おわ）りて本府へ返取せよ。右府は右に居（す）えよ」と記されています。この「兕」の正体は判然としませんが、水牛に似た一角獣で、鎧の材料になるほどの硬皮を持ち、角は酒盃に用いたという動物です。平安時代などは、どうも現在の日本人にはわからない「兕」とか「鶴（ぬえ）」とか、様々なものがいたようですが、この「兕」が狛犬の原型ではないかとも言われているので、なかなか興味深いものではないかと思えます。この説

を考えれば、狛犬には角がついていたということになります。

獅子と狛犬の配置については、『禁秘抄』と『類聚雑要抄』に共通して獅子を左、狛犬を右に置くとの記述があり、『類聚雑要抄』では、さらにそれぞれの特徴を「獅子は色黄にして口を開き、胡摩犬（狛犬）は色白く口を開かず、角あり」と描いています。ここにも「角のついた狛犬」が出てきますが、狛犬と獅子のセットが一つの組み合わせになっているという感じになります。狛犬の口の形を「阿（あ）・吽（うん）」と言いますが、この形は日本で多く見られる特徴です。獅子と狛犬のセット、それが左右を守り、仁王像のようになっているのではないのでしょうか。獅子・狛犬は向かって右側の獅子像が阿形（あぎょう）で口を開いており、左側の狛犬像が吽形（うんぎょう）で口を閉じ、古くは角を持っていました。鎌倉時代後期以降になると、様式が簡略化されたものが出現しはじめ、昭和時代以降に作られたものは左右ともに角が無いものが多く、口の開き方以外に外見上の差異がなくなっています。本来は角がないのだから獅子なのですが、これを合わせて「狛犬」と呼んでいるのです。この意味で「イヌ」が「犬」ではなく、「狗」という別の生き物のような漢字が使われているのですね。「犬」はある意味で、広く人間や神を守る動物ということで、「獅子」や場合によっては「虎」などもそのなかに入れられて、「狛犬」というように言われていたりします。しかし、その狛犬とは違うものに「狗」という字を当てているのは、いかにも日本人特有の区別ではなかったかと思います。

6 人間と対立する犬は前世を背負っている

さて、犬は人間の古くからの友達であるというような言い方をしました。ある意味で守り神というか、守り神を守る「番犬」そのものではないかと思われれます。また人間側の味方として神のところに行くというのが、どうも犬の役割のような気がします。

犬といえば、妊婦に深くかかわりがあります。今では、そのようなことにこだわらない出産が多いですが、昔、お産は女性にとってもかなり体力的に負担であり、母子ともに命を落とす危険が非常に多くありました。そのため、お産の軽い犬にあやかった風習がたくさんありました。代表的なものは妊娠五カ月の「戌の日」に岩田帯を付け、産婆を頼むのにも「戌の日」を選ぶというものです。岩田帯とは、妊婦さんのお腹が大きくなるので、それを守るためにした腹に巻く帯のことで、昔は結肌帯（ゆいはだおび）と呼ばれていた肌に巻く帯が、呼び方を変えて岩田帯になったという話もあります。この「岩田」には、「岩のような元気な赤ん坊を生んでほしい」という意味と、「祝田」ということと両方が語源というように言われています。また、犬はお産が軽いというだけではなく、妊婦の立場になって、子どもの守り神様のところに連絡に行ってくれるというような役目もあり、犬にまつわるものを非常に多く使うようになっているのです。

しかし、これだけ人間との間でかかわりが深い犬は、やはり因縁を持つてしまうものでもあります。『今昔物語集』の巻第三十一、「北山の狗、人を妻と為す語」では、京都の北山で

山に迷ってしまい、その際に「狗」に拉致され、そのまま嫁にされてしまった女性と会います。何とか、その晩だけでも泊めてもらうことを依頼すると、女性は「じつは、私は京都の某所に住んでいた人の娘なのです。あるとき異界の者にさらわれ、とりこになって何年も、このように暮らしています。不自由な暮らしではありませんが、でも……。ああ、まもなく、その者が帰ってくるので、ご覧になることでしょうか」と言います。そして、その主人を見ても「狗」であったのです。男は町に戻ると、人を集めてこの庵に再度行きます。「狗が驚いて出てきて、以前に来た男の顔を見るやいなや庵に戻った。しばらく後、狗は女を鼻先で押しつつ庵から出てきて、そのまま山奥に立ち去っていった。大勢が取り囲んで矢を射たけれど一つも当たらず、追いかけると、鳥の飛ぶような速さで、あっという間に山中にまぎれてしまった」。そして二、三日後に男は原因不明の病で死んでしまうのです。今昔物語集は、その話を紹介したうえで「男はまったく、つまらぬことを話したものである。信義のない者は、その背信によって身を滅ぼすのだ」というように締めくくっています。まさに、信義のない人間に対して狗が罰を与えたというようなことになります。友達ではなく、狗が神に代わって男を仕置きしたということになるのでしょうか。

また、このような話もあります。

やはり『今昔物語集』の巻第二十六、「東の小女、狗と昨ひ合ひて互に死ぬる語」です。あるところに少女が住んでいて、その隣に白い犬が住んでいました。「この犬は少女を目の敵にして、つねに噛みつこうとするのだった。一方の少女も犬を見かけると、ひたすら打とうとして向かっていく。人はその様子を見て、どういわけだろうと不思議がっていた。少女は病気になった時、犬のわからないところにかくまってほしい、それでないと私は殺されてしまうと言う。そのようにしたら初日は犬はいたが、翌日犬がいなくなった。心配になって少女を見に行くと、犬が少女に噛みつき、少女もまた犬に噛みついて、どちらも死んでいた」

今昔物語集は、「この両者は現世だけの仇敵だったとは思われないと、人はみな不思議がったということだ」としています。このように犬は前世の因縁も運ぶと信じられていたのです。ある意味、イスラム教のように前世で悪いことをした人が犬になっているというような考え方なのかもしれません。いずれにせよ、犬と人間が、かなり近しい関係だから、そのようになるのではないのでしょうか。

犬は人間の最も古い友人、それだけに人間に近かったり、あるいは人間の因縁をそのまま背負ってしまうことがあります。犬に対しても、あまり不義理をしたり、裏切ったりはしないように、そう教えられているのかもしれません。